

神道フォーラム

ISSA : International Shinto Studies Association

Vol. 48

神道国際学会会報
平成26年2月1日号

特定非営利活動法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F 電話：03-6805-7729 <http://www.shinto.org>

新年のご挨拶

平成二六年および二〇一四年の年が明けました。今年が世界にとっても神道国際学会にとっても、また皆様方一人ひとりにとっても素晴らしい年になりますように心からお祈り申し上げます。

神道国際学会は昨年正月から理事及び事務局の体制を一新し、それをもって昨秋には出雲大社と伊勢神宮との関わりおよび天皇制との相互関係について学問的には聖域に踏み込んだ国際シンポジウムを開催いたしました。その手ごたえ、反応については今一つだったということは残念ながら否めないものがありました。が、これは神道研究のみならず日本古代史の研究の、ある種混沌としたと言える現状を考えるとやむを得ないものであったと言えなくありません。神道は、もちろん、古代だけの問題ではありませんが、「日本国の成り立ち」と「日本人の発祥」についてのキーとなるべき問題群を提出しているものと考えます。そして実はそれは紀元後四世紀におけるシベリアからチベットそしてユーラシア草原東部にいたる「大アジア成立」の歴史的運動の基幹エンジンであると考えるべきものと思っています。そして、まだ一般的には認められていませんが、私個人はヨーロッパにおける同時期のローマ帝国およびゲルマン民族の激動と連動するものであると考え、すでに個人の著書においてはそう述べているものです。

その場合、当然ながら、神道は日本独自かつ個有の問題ではなく、世界的問題

であることになります。学者として私はそうであると何年も前から確信し、歴史学者および宗教学者に早く目覚めてもらいたいと思って活動してきました。しかし、これは、大変に難しい問題であることは当然理解されていることで、すでに三十年も前から大胆な議論をすることでも少しは知られていた私個人としても、少しずつ少しずつ開陳してきたものです。しかし、去年は日本史、東洋史、西洋史をつなぐ基軸的連関があるべきことに気づくべきだとの主張を少しずつ行い始めたところでした。それはもちろん、神道国際学会会長としてではなく、個人の学者としてのたまたまのこの時期における展開であったのですが、形の上で本学会会長に任命されたのが去年であったことは何かの「神縁」であったのかと思うことにしています。

今年はこの研究をさらに深め、知りたと思う人々には伝えていきたいと思っておりますが、それだともすれば「布教」ということになります。実は神道的には「布教」というのはあまりなじみません。別して、学会会長という職にもなじみません。ではどうするか。

昨秋転居した私の家の周りからは、富士山頂が望めます。また、その家周りの地域それ自体は、日本国成立期における丘陵式の横穴古墳や方墳が多数ある地域です。六・七世紀の多摩川下流域の人々が暮らしたあたりです。住宅地の今にも残る低い丘陵の深い森と曲りくねった道

を歩き来しながら風に乗って来るカミの息吹を感じ取るうという年になりそうです。

同じカミの息吹を自然と多くの人が感じ取るうとし始めたとき、そこに自然に社が生まれたのです。もちろん、自然と多くの人々が集わなくとも政治権力の中心が社や神殿をつくることも多く行われることです。実際、学者の歴史研究はそこに向かうことが多いものです。しかし、多くの人々が自然に集うようにならなければ、権力者が作った神殿も寺院も「繁栄」はしません。あるいは発展もしません。先に述べた「布教」とは一面、この「繁栄」および発展の学説におけるあり方なのですが、我が国における神道の成立が天智帝、天武帝以降の政治によるものだけではないということに多くの人が深い関心を寄せるようになったら、「布教」自身が求められるようになるものだと思います。これは昔からの真実であり、去年や今年急に変わるものではありません。求められるものは自然に求められるようになる。これを日本人は「神の思し召し」と観じました。当然ながらそれでよいでしょう。何も無理に考えを変えてやることはないのです。

今年も自然に佳き年になりますように祈ります。

栗本慎一郎
(神道国際学会会長)

伊勢神宮 「遷宮の儀」を 取材して

椎名潤
(岐阜女子大学客員教授・
神道国際学会監事)

三重県伊勢市の伊勢神宮で、足かけ九年間にわたって進められてきた第六十二回「神宮式年遷宮」は、大御神を新宮（新正殿）に遷す「遷御の儀」が平成二五年一〇月二日、皇大神宮（内宮）で、同一〇月五日、豊受大神宮（外宮）でそれぞれ勅使を迎えて執り行なわれた。

遷宮は神宮が二十年に一度迎える大行事である。個人的には四回巡り会ったことになるが、昭和二八年の時は幼少の砌で記憶なし。次の昭和四八年はインド滞在中で、平成五年の遷宮がはじめての体験であった。それも参拝ではなく、取材記者として。今回も取材陣の一人として、一〇月一日から六日までの遷宮祭全行事を取材することができたので、後世のためにも記録として残しておきたい。

式年遷宮は平成一七年五月に行われた「山口祭」から始まった。同祭は遷宮の御用材を伐る御杣山みそぎやまの山口に坐す神を祭り、伐採と搬出の安全を祈るもの。平成一八年四月には内宮・外宮の域内に御用材をはじめて搬入

する儀式の「御木曳初式」、平成二〇年四月には「鎮地祭」（新宮の大宮地に坐す神を鎮めまつる）、平成二四年三月には「立柱祭」と「上棟祭」と続き、平成二五年八月には新宮の御敷地に敷き詰める石を崇敬者が奉献する「お白石持行事」が行われた。しかし、こうした諸祭はほんの一端で、遷宮の主要行事は三十三にも及ぶ。

そして一〇月一日午前一〇時、内宮の「御装束神宝讀合」から、いよいよ本番の遷宮祭が始まった。祭主をはじめ、神職は新たに調進された装束に威儀を正し、新宮中重の四丈殿において、奉献された神宝等を式目に照らし

て点検した。同四時から「川原大祓」。内宮では、五十鈴川の右岸を祭場とし、これら装束や調度品を納めた辛櫃二十三合を居え、宮掌が祓を修して、諸具や祭主以下の奉仕員を祓い清めた。

一〇月二日の内宮「遷御」には皇族代表の秋篠宮文仁親王殿下のほか、安倍晋三首相、麻生太郎副総理ら八閣僚などが参列した。夕刻、勅使以下、黒田清子臨時祭主、鷹司尚武大宮司、高城治延少宮司、奉仕の神職百数十人が斎館を出て参進。一行は玉串行事所で太玉串を執ると石段を昇って正宮へと進み入った。石段下では政財界関係者ら



皇族を代表して「遷御」に参列された秋篠宮親王殿下（内宮）

後陣に護られながら御門を出発。提灯の明かりに、わずかに照らされた絹垣が闇に浮かびあがると、奉拝者は拍手をもつて拝した。やがて「御神体」は、正宮に隣り合って造営された新正宮へと厳かに入御した。

約三千人の特別奉拝者が静かに出御を待った。首相が参列したのは昭和四年、第五十八回式年遷宮に供奉した浜口雄幸首相以来のこと。

いつさいの灯りが消された浄闇の午後八時、天の岩戸の故事にならい、「カケコー」と鶏鳴が三声響き渡ると、純白生絹の行障・絹垣に覆い秘された「御神体」が前陣・

また「遷御の儀」に前後して、杵築祭（新殿の竣功を祝して御柱根を撞き固める祭儀）、後鎮祭（神殿の竣功を鎮謝し、その御床下に天平瓮を奉居する祭儀）、大御饌（遷御の翌朝、新宮における初めての大饌供進）、奉幣（遷御とともに古式きわまる儀式で、勅使・祭主以下の奉仕員は遷御と同じ装束を著け、太玉串を内玉垣御門下に奉納）、御神楽奉送などの諸祭事が執行された。

なお、神宮では「遷御」を前にして、『遷御の儀』は暗い中でのおつとめであり、祭主の万全を期するため、池田祭主さまに代わり、黒田臨時祭主さまがご奉仕になります」と発表していたが、一連の祭儀の中で、「奉

幣」や「御装束神宝讀合」などは池田厚子祭主が奉仕された。一〇月五日の外宮「遷御」にも、皇族を代表して秋篠宮殿下が参列された。内宮同様、勅使を迎えるとともに、黒田臨時祭主以下、大宮司、少宮司、神職百数十人が奉仕。外宮での鶏鳴は「カケコー」でなく、「カケロー」三声。小雨模様にも関わらず、四千人の特別奉拝者が静かに重儀を見守り、「御神体」は浄闇の中、滞りなく新宮へと遷った。

「遷御の儀」においては、内宮・外宮とも、出御の時刻に合わせ、天皇陛下が皇居・新嘉殿の庭上で神宮に向かって遙拝された。今回の遷宮には、五百七十億円の経費が費やされ、内宮、外宮の神殿造営のほか、別宮、摂社、末社など六十を超える建物、そして装束、装飾品など総計千六百点が新しく作り替えられた。また報道陣は三百人を超え、はじめて設置されたメディアセンタールから、連日にわたって、日本民族生命の源泉として長い歴



端麗な遷御奉仕服に威儀を正して外宮へと進まれる黒田清子臨時祭主（中央）

二〇一三年の式年遷宮に思う

ジョン・グリーン（国際日本文化研究センター教授）

二〇年ごとに行われる伊勢神宮の式年遷宮は、何らかの形で一三〇〇年も前まで遡るユニークなイベント。歴史を研究して

いる筆者は、その長い歴史の中の変遷に関心を持つ。伊勢神宮は、永久不変な存在だという説もあるが、伊勢研究の醍醐味は、むしろその常に変遷し、時代状況にあわせる姿。遷宮は、神宮が変遷する大きなきっかけとなる。

今回の遷宮は、伊勢神宮の自然との関係に大きな変化を見せた。遷宮に使った用材の大多数は、依然として木曾山から取ったが、七〇〇年ぶりに宮域林からも伐採された。これは、宮域林の二〇世紀に入ってからの森

林管理が優れている一結果で、将来は宮域林から用材のすべてが刈り出せる見込みである。

今回の遷宮で全く別次元の開があった。それは、安倍晋三総理大臣が公人として内宮の遷御に参列員として参加した、という画期的な出来事。いわゆる「国家神道」時代だった昭和四



安倍晋三総理大臣が2013年10月2日に内宮の参道を歩く。総理による遷御の儀への参列は戦後初めて。（朝日新聞）

年の遷御以来の総理による参加。安倍総理は、参列員席に座る特権を有し、天照大神が本殿から新殿に遷ったさい、その行列に加わったのである。以前から「天皇の祭祀」という色合いが強くなってきた遷宮は、今回さらに国家儀礼化へと大きな一歩を踏み出したことが分かる。

物理的な変化もあった。天照大神に供える装束の染めが本来の植物染料にもどった。さらに、装束・神宝が収められる辛櫃は、素木だったのが今回昭和四年をモデルとし、漆塗を施し、金銅の金具もつけた鮮やかなものにした。永遠に変わらないかのように見える伊勢神宮の式年遷宮は、実は毎回様々な変更が見られる。それぞれの変化が何を目的とし、何を意味するのかを吟味することとは、歴史家の営みである。



話題のこの人

式年遷宮を全部見た、唯一の外国研究家

スベン・M・バス氏

Svend M. Hvass

ここ数年、式年遷宮のいろいろな儀式取材する番組を観た人は、スベン・M・バスというデンマークの方がたびたびテレビ画面に現れたことに気がつかれたかと思いますが。一〇月二日に行われた内宮遷御の儀の時にも、そして五日の外宮遷御の時にも、三重テレビの中継番組にバス氏の映像と短いインタビューが何回も出ました。このテレビ局が正月早々に放送する予定の遷宮特集にもまた、バス氏の体験談がたくさん盛り込まれることになるそうです。「そのため

の撮影は、伊勢だけではなく私が住んでいるコペンハーゲンでも行われた」と、バス氏は語っています。バス氏はデンマークで建築家として活躍する傍ら、建築に関わる本や記事の著者でもあります。一九九九年にAristoから出版された「Ise - Japan's Ise Shrines - Ancient Yet New」(日本の伊勢神宮―古くて新しい)がバス氏の最初の著書でした。英語で伊勢神宮の建築様式を紹介する数少ない本のなかで今でも、一番充実したものです。神宮そのものだけでなく、現代の日本建築の例をも紹介しているということが、この本の特徴です。バス氏が、伊勢神宮を古代の遺跡ではなく、今も生きている長い美学的な伝統の原点と

して位置づけていることがよく分かります。バス氏が初めて伊勢を訪問したのは、一九七〇年のことでした。その時には、伊勢について知識も興味もなかったそうです。来日の切っ掛けは、この年に開催された大阪万博でしたが、そこで特にバス氏の興味をそそらせたものは当時間発されつつあったインフラータブル構造技術でした。日本の伝統的建築に心が引かれるようになったのは、その後のことでした。式年遷宮の長いプロセスを通して二十年ごとに再建される伊勢神宮に特に魅了され、一九七三年、一九九三年、二〇一三年の遷宮を身近に観察・研究するチャンスを見逃しませんでした。

このたびの遷宮では、バス氏は八年以上をかけて、山口祭から遷御の儀まで、すべての祭典や行事を取材することにしました。第六十二回式年遷宮を端から端まで目撃できた外国人はほかにはいないはずです。バス氏にこのたびの遷宮の印象について聞いてみました。「やはり、遷御の儀が一番印象的でした。この祭典を三回もフーリランズ記者、または特別奉拝者として目の当たりにすることができ、光栄と思っています。午後から夜にかけて、夕闇に包まれてい

く森の音を聞きながらただす待つという時間は、何とも言えない雰囲気を感じます。ようやく遷御の行列が古殿地から現れる時になったら灯りがすべて消され、数少ないたき火と松明の薄暗い光しかありません。楯や笠など、御神宝の数々が運ばれていくことはほんやりと見えますが、ご神体は絹の織物に包まれ、二重の入れ物の中に収められ、そしてさらに絹垣にめぐらされているので、完全に人の眼から隠されています。千三百年以上、多分ほぼ同じ形で行われてきた儀礼を体験することは、興味こそそそるといっても、私にとって大きな感動でした。この体験を消化するには、時間が必要です。」

一九七三年以来、三回の遷宮に出席したバス氏に、それぞれの遷宮の違いについて尋ねると、バス氏は以下のように述べています「暗い中、そして遷御の短時間で、細かい違いはなかなか分かりません。遷宮をめぐるプラクティカルな面には、もちろん変化はあります。しかしもっと大事なものは、自分とその間に四十年も年をとったことで、見る目も心も大きく変わったということなのです。」

Mark Teeuwen

神籬を立てる

懸野直樹(野宮神社宮司)

伊勢斎王Ⅱ斎宮(賀茂斎王は斎院)の起源伝承は崇神天皇六年、皇女豊鍬入姫命に倭笠縫邑に「磯城神籬」を立てたことに始まります。斎宮の制度が確立するのは天武天皇(在位六七三年―六八六年)とされていますが、「神籬」を立てるのが、斎宮の最重要の役割であることに変わりはありません。斎宮が神宮に赴くのは九月の神嘗祭、六月十二月の月次祭の「三節祭」の時だけでした。その時に斎宮は祝詞を奏上したり、献

饌をしたりということはしません。ただ、祭典の最初に太玉串を瑞垣御門の西のほとりに立てるだけなのです。太玉串は神への奉献物ではなく、元々は神の依代です。

天皇の御即位などにより斎宮に選ばれると、宮中の初斎院と野宮で併せて約三年間の精進潔斎の生活を送ります。精進潔斎の生活というのは、例えば生臭いものを食べないという意味ではありません。火炬小女と呼ばれる清らかな少女が管理する「浄火」と戸座と呼ばれる清らかな少女が汲む水を用いた「清浄な食事」を召し上がる。外七言内七言という「忌み言葉」で言葉も慎むという生活です。野宮に入る時と出る時には大がかりな禊が行われます。平安時代、都から伊勢へ向かう斎宮群行は五泊六日約五百人の壮大な行列であり、この途中ででも禊を繰り返します。そして直接神宮に入るのではなく、現在の明和町にあった斎王宮に入り、こ

こには最盛期約二千人の官人と家族が住んでいたと推定されています。「三節祭」の時には大淀の浜で禊祓をして小俣町にあった「離宮院」に入り一泊。翌日宮川を渡る時にも禊祓をして外宮に入り太玉串を立て、離宮院に戻り一泊。翌日は五十鈴川で禊祓をして内宮に入り太玉串を立て、離宮院に戻り一泊して翌朝斎王宮に戻ります。

神を迎えるために、これだけの時間、時間、莫大な費用をかけていた例は他の神社にはありません。昨年の式年遷宮で「常若」ということが言われていましたが、古くは御遷宮とは別に毎年三度神を招き直し、「常若」を図っていたと言えるでしょう。



斎宮行列は毎年十月第三日曜日 野宮神社例祭に引き続いて行う。



嵐山での御禊ノ儀 本来は川に向かって幕を張り人には見せないものであった。

「遷宮」を記念し 国際神道セミナー「出雲と伊勢」を開催 東京・六本木で聖地の根源や様相、 そして変容に迫る活発な議論を展開

本会主催の国際神道セミナー「出雲と伊勢―古代王権と聖なる空間（二大聖地のルーツと変容に迫る）」が平成二五年一〇月二六日午後、東京・六本木の政策研究大学院大学・想海楼ホールで開かれた。伊勢神宮で二十年に一度の式年遷宮、また出雲大社で約六十年に一度の遷宮がそれぞれ行われた節年ということで、「遷宮」を記念して企画された公開セミナーだ。会場には約二百人の熱心な聴講者がつめかけた。【第一部】では、本会の栗本慎一郎会長（有明教育芸術短期大学学長〈当時〉）が「古代王権と出雲・伊勢」と題して基調講演を行い、これに対して三宅善信理事長（金光教泉尾教会総長）がコメントを行った。続く【第二部】では、パネルディスカッション「出雲と伊勢―聖なる空間」が催され、パネリストのフアビオ・ランベッリ理事（カリフォルニア大学サンタバーバラ校教授）が「出雲神話における国際感覚の受容」、ジョン・グリーン副会長（国際日本文化研究センター教授）が「聖なる空間としての宇治山田」、マイケル・パイ理事が（マールブルク大学名誉教授）が「お伊勢参りと巡礼」と題して、それぞれ講話を展開した。ディスカッションのコーディネーターは岩澤知子常任理事（麗澤大学准教授）が務めた。このあとの質疑応答ではパネリストと基調講演の栗本会長、そしてコメンテーターの三宅理事長が揃って登壇し、聴講者からの質問に答えた。



基調講演中の栗本会長

「古代王権に見られる『連合制』
『二重制』の意義を強調」
基調講演で栗本会長

開会にあたり挨拶に立った三宅理事長は、海外研究者も含めて日本文化の研究に取り組むという本会の活動内容を紹介するとともに、「今日は日本文化の根源ともいえるべき伊勢や出雲について各先生からお話をいただく」と述べて、今セミナーの開催意義を強調した。



コメントを行う三宅理事長

【第一部】に入り、基調講演の栗本会長はまず、東アジアの古代王権に見られる「連合制」や「二重制」など、その特長を解説した。そのうえで同会長は、日本の古代国家における蘇我氏政権から天智朝、そして天武朝へと遷りゆく古代史の流れの中で、その時々が「連合制」

とともに、天孫系でないものを引き受けた出雲勢力の権力についても考察を加えた。

栗本会長の基調講演に続いて三宅理事長がコメントを行い、「栗本会長からは、『国』というものを考えるときの視点として、『二重性』や『聖方位』などを教示いただき、皆さんも聖なる空間、聖地について考えるときのポイントについて理解を深めることができたと思う」と述べた。

聖地たる「伊勢」「出雲」の特色や 変革を討議―パネルディスカッション

「伊勢と出雲の中世神道説に見られる『受容から固有への交換』ランベッリ理事

【第二部】のパネルディスカッ

ションでは、最初にパネリストの三氏がそれぞれ講話を行った。まずランベッリ理事は、日本中世の神道説の国際感覚について考察。密教や宋字のメタヒスト

リーの中に個々を超えるような次元の意義があると考え、意識が中世神道説には見られるとし、外来のものをローカルなものにしていくという意味でのグローバリゼーション的な動きは、出雲にも伊勢にもうかがえると指摘した。とくに伊勢神道の国際感覚については、当時の神道家は古代の日本神話だけで充分だとは考えていなかったようだと論じ、「密教」や「大日如来」を取り込みながら新たな神道説を整えていったと分析した。また出雲大社の動きについても、「国引き神話」が中世になると、仏教に登場するインドの靈鷲山との関係性で捉えられるようになる」と説明した。そして「神道説によって仏教や中国思想が日本に土着化される側面と、神社というシンボリズムの普遍化が行われる側面の、二つの逆のことが中世には起こった。その意味で神道とは国際感覚の変換装置でもあり、受容したものを日本固有のものにしうるものでもある」と主張した。

「近代伊勢の『浄化』が
新しい伊勢像を作った」
グリーン副会長

続いてグリーン副会長は、伊勢の近代に視点を当て、聖地の変遷について考察した。まず、庶民の巡礼地でもあった伊勢が明治期になると、政治秩序を表現する土地、あるいは天皇の聖



パネルディスカッション中の理事たち（左から岩澤常任理事、パイ理事、グリーン副会長、ランベッリ理事）

地に変えられた歴史が存在するとの立場から、伊勢の「浄化」という作業に関わった人物や団体を紹介した。その一人、明治初めに神宮少宮司だった浦田長民は、仏教や御師の「浄化」のために策動したとし、また、やはり明治初期の実業家、太田小三郎は「神苑会」を立ち上げて神宮の「浄化」に力を注いだとした。とくに象徴的なものとして、伊勢にあった歓楽街としての古市地区が廃絶されていった点を挙げ、「明治期には新しい

伊勢像が作られた。聖地には儀礼性や伝説的な出来事も勿論あって、その考察は大事だが、同時に、その変遷や政治性という視点を抜きに考えることはできないはずだ」と指摘した。

「様々な宗教要素によって互いに影響しあう仏教と神道」パイ理事

続くパイ理事は、伊勢への宗教的な「旅」について考察するために、まず宗教文化の要素のなかから、「絵馬」「お巡り」「朱

印」などの事例をスライドで紹介した。そして、「絵馬などを見ると（神道から仏教へ）、また、お巡りという要素を考えると（仏教から神道へ）」という双方向の影響力が見うけられる」とした。さらに同理事は、神社巡りには個人的な利益だけでなく、愛国心を強めたり、国家の隆昌を祈ったような要素もあるとし、とくに伊勢は、特別の参拝地であるとともに他教の聖地を統合するような性格をおびることによって「単なるお参

りではなく、新たな体系を作りつつあるという流れも伊勢には見られる」と論じた。

「聖地の精神的変容は個人と共同体の両側面から検討すべき」岩澤常任理事

以上の三氏の講話を受けてコーディネーターの岩澤常任理事は、「聖地とは何かという問いに対して、宇宙論的なレベルでの意味づけのみならず、歴史的・社会的・政治的レベルでの意味づけについて議論していた



「聖地」とまとめるとともに、「聖地」は、最近の巡礼ブームに見られるような個人の精神的変容をもたらず場として機能するのみならず、各々の時代のナショナル・アイデンティティを象徴する場にもなってきた、という多義的な側面を強調した。

聖地の「聖」と「俗」に関して活発な質疑応答も

ディスカッションではこのほか、各氏の講話を発展させるかたちで議論が進んだ。とくに、日本が自らのアイデンティティ

を説明する際に、海外からの言説を、興味を持って取り込みつつ新しいものを造り上げるといふ、いわば日本文化の特性についても焦点が当てられた。さらには、近世に伊勢を整



閉会の辞を述べる芳村理事

然としたものに作り変えたために、混然としながらもダイナミックな魅力を秘めていた「伊勢参り」という現象が、変革を受けてしまったのではないかとの視点からも議論が展開した。このあとの、会場からの質問に講師陣が答える質疑応答では、とくに伊勢の変革などについて質問や感想が寄せられ、一般的な「聖と俗」とともに、伊勢という聖地における「聖と俗」の捉え方などに発言が及んだ。閉会にあたっては芳村正徳理事（神習教教主）が挨拶し、「一つのことを眺めることによってその中味を深めることができることがある。今、多くの皆さんから関心が寄せられている伊勢や出雲というものが、今回の議論によって、また輝いていくものになればと思っています」と述べて、セミナーの成果をまとめた。

『西之島新島出現に思う』

金光教泉尾教会 総長／(株)レルネット代表
三宅善信

読者各位には、健やかに新しい年を迎えられたことと拝察する。昨年日本は、東京オリンピックの招致成功やアベノミクスの効果もあってか、20年以上続いた経済不振の出口が見え、社会に明るさが増してきたように思えるが、被災地の復興や原発事故の後始末は遅々として進まず、また、日本の周辺では、海と言わず空と言わず、領土的野心を剥き出しにした近隣諸国が無謀な挑戦をエスカレートさせている。

そんな中、昨年末には、太平洋の遙か南方の小笠原諸島の西之島付近で、海底火山の噴火によって突如として「新しい島」が出現するという瑞兆があった。日本の国は、神代の昔から、次々と海中から湧出した島々によって形成されたと神話は伝えている。それ故、今回の新島出現は、まだ八百万の神々がこの国の人々を幸わっておられるのだという証でもある。

今回出現した新島は、溶岩の噴出によってドンドン「成長」しているとはいえ、まだ広さは甲子園球場の数倍程度で、標高もせいぜい30mほどの「小島」に過ぎないが、われわれの目に

見えない海中には、水深4,000mの太平洋の海底から屹立した富士山よりも高い海底火山という「根っこ(実は本体)」があり、その上に「ちょっと顔を出している」のが今回の新島なのである。

われわれは、つい「眼前の現象」に目を向けがちであるが、物事が目に見える形になって現れるためには、計り知れない自然の作用や先人の苦労が積み重なって初めて「形になって現れる」のである。このような現象を古代の日本人は「神々の働き」と捉え、崇めたのであろう。今回の新島出現は、現代に生きるわれわれにあらためてそのことを気付かせてくれたのである。

昨年はまた、神道界では、出雲大社と伊勢の神宮が共に遷宮を迎えるというめでたい年でもあった。両社の古代より連綿と伝わる神事が日々正確に繰り返され、常に神殿が完全な形で維持・再生され続けているという信仰文化形式は、世界に類を見ない希有な存在である。神宮の式年遷宮のために、29万の人々が自ら進んで木材や白石を運ぶ勤労奉仕に喜んで従事し、年

間に1,400万人以上の人々が参拝するなど、日本人と神道の紐帯は近年になく強まった感がある。

日本列島に暮らす人々は、太古の昔より、地震・津波・噴火・台風等の自然災害に晒され続けてきた。これらの圧倒的な天地自然の威力を崇め、かつ、農業や漁業などに従事する人々が勤勉・実直な態度でもって自然と接することによって、この自然のエネルギーを取り込んで人間生活を少しでも豊かに送れるように営んできたのが日本人であり、その天地自然の力への感謝を表す儀礼が神道である。

ところが、残念ながら、内外共に神道に対する理解が得られているとは言い難い状況である。否、これまで、そのことに対する神社界側の努力が不十分であったことは、神道に対する日本のメディアの報道の仕方や昨今の国際情勢を見れば明らかである。神道国際学会は、これらの状況に新しい地平を切り拓くために1995年に設立され、これまで内外で多くの実績を残してきた。本会が多彩な活動を展開してこれたのは、本会の創設者や長年にわたって本会の活動を支えてくださった会員各位の支援があったればこそそのことである。まさに、西之島新島同様、現在、われわれの目に見えている神道国際学会の背後には、巨大な海底火山が支えていてくれるのであり、今回の新島出現は、あらためてそのことをわれわれに気付かせてくれたと言える。



神社巡り① — マイケル・パイ

上御霊神社

●京都市上京区上御霊前通烏丸東入、上御霊豎町495

烏丸線の鞍馬口駅の南東の出口（エレベーターのある出口）から出て、少し南方向に歩くとすぐに御霊前通を通り抜け、上御霊神社の鳥居と門が見えてきます。「御霊」という旧字体が正式な宗教法人名称だそうですが、その姿を拝見するとかつての趣を十分に彷彿とさせてくれます。神話の時代に遡るほど大昔ではなくても、創建は863年なので、この神社は実際に古くから存在していることになります。中へ入って一番強く感じることはその静けさです。千年以上前の御霊は、いま生きている人間を静かに守る御霊と成っており、神職についておられる人々がこの御霊の世話をして下さっています。

昨今も、疫病の恐れは完全にはないということはないのですが、医学がまだ未発達時代には存在的な意義を持って、病や不幸なことが御霊によって起こるのではないかと心配しておりました。現代でも神社は、厄除と病気平癒、または心鎮めを祈るところですが、一般の人々は、それ以外のちょっとした現世利益（御既得）も求めています。いわゆる家内安全、家業繁栄、交通安全、旅行安全、安産、学業成就、書道上達まで含んでいます。お参りしてから絵馬をかけるところがありますが、平安時代にはこういう可愛い絵馬はまだなかったでしょうから、現代

のニーズに合わされてきているといえます。

毎月18日に、さえざり市という簡単なフリーマーケットが催されるために境内が活気づきます。天神様や東寺ほどはありませんが、近所の人々の楽しみになっています。近所といってもこの神社の氏子は現在上京区・北区にわたって1,300戸にもなるそうです。それも現代の人口の数を映すと思われますが、ある意味で民衆化された神道の顔でしょう。もともとは「桓武天皇の御宇延暦13年5月崇道天皇の神霊を現今の社地に祀り給ひしを始め」ということ

できわめて皇室に関係を有する神社でした。明治維新まで、夏祭りの行列は今の今出川から御苑の中まで進みました。明治維新と共に皇居が江戸城に移り、この習慣の意味はなくなったと考えられて行われておりませんでしたけれども21世紀にはいつてから、皇室を尊敬するトレンドが高まって、再び見直されるようになりました。祭りに参加するグループは熱心で、近くにある末広神社の青年会はその一つです。末広神社は独立している北区の小さな神社ですが、その氏子は同時に御霊様の氏子の意識を持って、青年は15歳ぐらいから少なくとも40歳までで、そのあとは親の会に入ります。

また境内に戻りましょう。南側にも鳥居と門があり、垣根に沿う堀の中、また両面に季節によって花、植



上御霊神社の鳥居

物、蝶や昆虫が見られます。住民が駅へ急いでいても、この鳥居をくぐって途中でちょっとお参りして西の鳥居から出ることもできます。この静かな境内の美しさを心に保って仕事へ出かけることでしょう。

詳しい情報（鎮座の神様、年中行事、境内の末社などは）<http://www.kyoto-jinjacho.or.jp/shrine/02/004/index.html>



宮司さんと子供



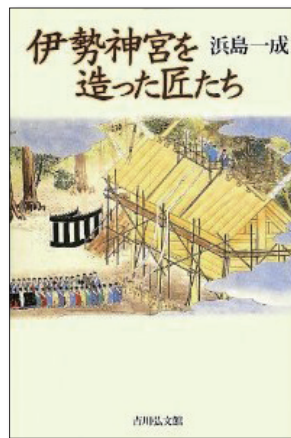
境内の様子

書評

伊勢神宮を造った匠たち 浜島一成 [著]

吉川弘文館、2013年、152ページ、ISBN 978-4-642-08092-7、2300円

評／茂手木潔子（有明教育芸術短期大学教授 / 音楽学）



本書は貞治2年（1363）の『遷宮例文』を引用しながら、式年遷宮に携わった匠の系譜を整理した文献研究である。過去の文献を詳細に分析し、必要最小限に伊勢神宮の造営記録も加えてまとめている点に著者の努力が伺える。

著者、浜島一成氏は中世工匠史が専門の研究者である。本書は全6章で、「序章 伊勢神宮の建築」「第一章 式年遷宮で行われる儀式」「第二章 式年遷宮に携わった神官」「第三章 匠の系譜」「第四章 台頭する新たな匠」「終章 工匠たちの一二〇〇年」で構成される。どの章も先行研究を引用しながらまとめ、大学の授業等で教科書として使用する目的で、研究論文をコンパクトにして出版した書籍であろうと推測した。

本書のような文献研究ではやむを得ないかもしれないが、著者自らが式年遷宮を体験、もしくは映像資料などで追体験したことを想像させる具体的な記述はなく、浜島一成という著者の姿が見えにくいのは残念であった。

「匠たち」に関わる儀式の部分、例えば山口木本祭に関する記述で、「儀式では、造営使等が正宮を参拝した後、饗膳の式が行われます。この饗膳は造営の事始の祝儀を意味しており」とあり、工匠は饗膳を受けるわけだから、読み手としてはその有り様が想像できるような記述を望むのだが、記述は「工匠は饗膳を受けた後」と儀式の次第のみでさりと済ませてしまうなど、本書では、資料に忠実に、資料の域を超えない記述で一貫している。

評者の専門領域が音楽学で、楽器製作や酒造業に携わる匠への聞き取り調査研究の方法を用いているので、「匠たち」のタイトルを見て、当時生きていた人間としての匠たちの技の内容や、匠によってどのように工夫や伝統のコンセプトが異なりまた受け継がれてきたのかという点を期待したが、建築史には門外漢の読者の予想は見当違いだった。本書の最も中心となる第三章「匠の系譜」は、文字通り匠の名前を連ねた系譜であり、読み手はこの第三章を読んだ所で、この書の「匠たち」というタイトルが匠の系図の研究を意味することが分かるからである。ここでの「匠たち」の記述は、匠の職分ごとにどのような名前の匠がいたのか、謝金はどのくらいだったのかを整理したものである。

昭和50年代に国立劇場演出助手を勤めていた筆者の記憶の中には、伊勢の木遣歌の舞台公演で伊勢音頭の原型とも言える御木曳の印象的な歌と、ギーッと軋みながら進む御木曳車の音が鮮明に残っている。この他にも式年遷宮には声や音を重要な核とする儀式も多くあるので、欲を言えば、そのあたりについて少しでも良いから一般読者に儀式の様子が想像できるような記述も欲しいところだった。

文末の参考資料のリストが非常に詳細にまとめられているので、式年遷宮の歴史研究者にとって寄与すること大であろう。

書評

常若の思想—伊勢神宮と日本人 河合真如 [著]

2013年、祥伝社、203ページ、ISBN978-4-306-61466-9、1575円

評／芳村正徳（神道国際学会理事 / 神習教教主 / 日本宗教連盟理事長）



著者は、自然との共生思想を持つ神道に共感して昭和48年に神宮研修所に入所。同50年より神宮に奉職し、現在は神宮司庁広報室長を務める。

本書は第61回、第62回の遷宮に奉仕した現役の神宮禰宜が書いたものであり、外から見た遷宮ではなく、内側から見た遷宮に関する記述と併せ、脈々と受け継がれてきた神道文化の源流ともいえる事柄にも幅広く触れている。

書名にある「常若^{とこわか}」は、いつまでも若々しいことを指す言葉だが、遷宮の背景にある思想としてこの言葉を用いたのは筆者が初めてであろう。持統天皇4年（690）年から1300年に亘って行われてきた式年遷宮を著者は「永遠の記憶装置」と呼ぶ。パルテノン神殿など石の建造物は、永遠を求め堅守するものであり、やがて滅びる。しかし、木材を用いた神宮は、祖型を保ちながら変化を促進する「常若」であり、それは同時に永遠につながるという。

遷宮のクライマックス「遷御の儀」は平成25年10月2日（内宮）、5日（外宮）に行われたが、遷宮の最初の祭りである山口祭（御用材の伐採と搬出の安全を祈願する祭り）はそれよりも8年も前の平成17年に始まる。神宮とは内宮と外宮のみを指すのではなく、それぞれの別宮、摂社、末社を全て合わせると125社に上る。別宮14社が当年度と翌年。その後摂社、末社の順に遷宮が行われ、完全に終わるのはなんと10年後の平成35年頃という。しかし、それが終わっても2年後には次の遷宮の山口祭が始まるのである。

遷宮がなぜ20年に一度行われるのかについては、尊厳保持説、原点回帰説、時代生命更新説など諸説はあるが、著者は櫻井勝之進（皇学館大学理事長）

説、小堀邦夫（現神宮禰宜）説を新説として紹介し、米作りによって生活文化を築いてきた瑞穂の国では榎の最長貯蔵年限を式年の根拠とする小堀説が有力だとしている。

またその意義については、神嘗祭の延長上にある祭儀と捉え、「神の死と同時に再生」と捉える諸説に対して、皇學館大學名誉教授であった西川順士教授の「祭員として奉仕した場合に神にも人にも生命の衰えがあり、これを再生させるといった考え抜いた理論に耳を傾けてはいないはず」とそれらの説を看破した言葉を引用し、神の永遠性と共に歩み続けてきたことによって国の繁栄があったと述べている。

遷宮では装束、神宝類まで714種、1576点が人間国宝など当代一の名工らによって新しく作り変えられる。そこには技と材料と文化の継承が行われている。このような大規模な遷宮には、無駄遣いや自然破壊といった批判が寄せられた時期もあったが、その背景には、常に自給自足と再利用、自然保護の精神があり、神宮側もその具体的な方策をPRすることによって大方の見方が変化してきているという。

遷宮の影響によって平成25年は、過去最も参拝者数が多かった平成22年の年間883万人を9月の時点で上回り、当年度中に1330万人の参拝が予想されている。この本を読むことによって、神宮に参拝したことがない人は、神宮や式年遷宮が身近に感じられ神宮に参拝したいと思うだろう。また神宮に参拝したことがある人や専門家、神職ほかには新たな発見があるのではないだろうか。



『石灰壇毎朝御拝の史的研究』
石野浩司、三八〇〇円、皇學館
大學出版部、二〇一一年

『海外神社跡地の景観変容』
中島三千男、一〇五〇円、御茶
ノ水書房、二〇一三年四月

『明治初期の教化と神道』
戸浪裕之、五〇四〇円、弘文
堂、二〇一三年六月

『本当はすごい神道』
山村秋義、七八〇円、宝島社、
二〇一三年七月

『天皇の祈りと宮中祭祀』
久能靖、二一〇〇円、勉誠出版、
二〇一三年七月

『古寺巡拝』

学会・学術情報

●国宝大神社展
会期：平成二十六年（二〇一四
年）一月十五日（水）～三月九
日（日）
場所：九州国立博物館 三階
特別展示室
福岡県太宰府石坂四一七二
開館時間：午前九時三〇分～午
後五時（入館は午後四時三〇分
まで）
月曜日 休館

上田正昭、二九四〇円、学生社、
二〇一三年七月

『古代ヤマトと三輪山の神』
大神神社編、二六二五円、学生
社、二〇一三年八月

『房総の伊勢信仰』

千葉県神社庁、五二五〇円、雄
山閣、二〇一三年九月

『Kami ways in nationalist
territory: Shinto studies in
prewar Japan and the West』
Bernard Scheid編、五、八〇ポ
ンド OWA、二〇一三年

『大阪のかみさん仏さん』

釈徹宗・高島幸次著、一五〇〇
円、140B出版、二〇一二年

『日本の戦争と宗教1896-
1945』
小川原正道、一七八五円、講談
社選書メチ、二〇一三年

『日本人と神様 ゆるやかで強
い絆の理由』
櫻井治男、八一九円、ポプラ新
書、二〇一三年

●特別企画 おかげ参りと街道
文化展

会期：平成二五年一月二七日
～平成二六年二月二三日
場所：松城市立歴史民族資料館

●特別展「海を伊勢神宮へグル
メな神さまたちの理想郷（ユー
トピア）」
会期：二〇一三年九月一四日～
二〇一四年三月三十一日
場所：海の博物館展示A棟と特
別展示室

〒五一七-〇〇二五 三重県鳥
羽市浦村町大吉一七三一-六八
☎〇五九九-三二一六〇〇六

理事の業績・研究報告

三宅善信理事長

三宅善信理事長は、二〇一三年度
後半には、九月一〇日に開催された
第一回大阪府宗教連盟・大阪府佛教
会合同研修会で講師を務め、『檀家寺
は生き残れるか？ 寺院・神社・教
会の抱える危機』という講題で基調
講演を行った。

九月一六日には、日本カトリック
司教協議会主催のシンポジウム『宗
教者の使命——自死をめぐる』に
神道国際学会理事長として出演。神
道的な価値観から、人間のいのちの
あり方について意見を述べた。本論
については、近日、講演録が刊行予定。
さらに、十一月二〇日から二二日、
ウィーンで世界宗教者平和会議（W
CRP）第九回世界大会が、世界各
国から六百名以上を集めて『他者と
共に生きる欲び』をテーマに開催さ
れ、WCPR日本委員会理事として
これに参加した。

ファビオ・ランベッリ理事

この一年間、日本における文化と
宗教の関係を様々な方向性で追求し
続け、その結果、著書三冊を刊行す
ることができた。

・Buddhism and Iconoclasm in East
Asia: A History（仏教と聖像破壊
の東アジア史（共著）. London and
New York: Bloomsbury, 二〇一二年
十一月

・A Buddhist Theory of Semiotics
（仏教記号論序説）（単著）真言密教
の記号論的考察とその文化的な広が
りの研究. London and New York:
Bloomsbury, 二〇一三年五月
・Zen Anarchism: The Egalitarian
Dharma of Uchiyama Gudō. 禅ア
ナーキスムー内山愚童の平等法
Berkeley: Institute of Buddhist
Studies (Contemporary Issues in
Buddhist Studies series), 二〇一三

年一〇月

論文には、「浮遊する記号としての
『伊勢』——日本史における伊勢信仰の
多重性と神道の絶えざる再コード化」、
仏教と環境意識、日本近世における
イスラーム教とムハンマドの識、日
本の天災の宗教史などがある。

また、国際意識や交際交流からみ
た神道史の原稿を書き続けている。

アレキサンダー・ベネット理事

・『Hagakure: The Spirit of the
Samurai』. Tuttle, 単著、二〇一四年
四月
・文芸春秋編、『文藝春秋オビニオン
2014年の論点100』、『日本柔
道の復権は可能か』アレキサンダー・
ベネット著
・『日本人の知らない武士道』、文春
新書、単著

・『The Global Migration of Budo and
its Cultural-Political Ramifications』
『IBU Budo Series Volume 2』(IBU
Budo Series Volume 2) 国際武道大
学武道スポーツ科学研究所、魚住孝
至・アレキサンダー・ベネット（共
編著）、項目執筆 一七二二頁
・『Budo in the Global Era: A
cross Cultural Analysis of Issues
Pertaining to Globalisation』(IBU
Budo Series Volume 2) 国際武道大
学武道スポーツ科学研究所、魚住孝
至・アレキサンダー・ベネット、共
編著

・『Kendo World Journal Volume 6』
文化舎インターナショナル、編著
・『障害者による武道事例の調査研究
——中学校武道必修化を契機としたイ
ンクルーシブ教育の実現に向けて』
松井完太郎、アレキサンダー・ベネッ
ト ほか、『武道・スポーツ科学研
究所年報18』、国際武道大学、共著、
八九九八頁

茂手木潔子理事

1. 執筆活動
(1) 単著『モースと北斎——日本の音

文化を描いた浮世絵師と博物学者』
（有明双書）全一〇六頁 二〇一三年
三月 武久出版

(2) 報告『E.S. モースコレクション
ンにおける日本音楽資料の悉皆調査
報告』[その3] 『有明教育芸術短
期大学研究紀要 第4号』pp. 一一
五—一三四 二〇一三年三月、有明教
育芸術短期大学

2. 公演企画・演出など
(1) 「伝統芸能見本市～春迎え～」
二〇一三年二月六日、アーツカウン
シル東京主催、東京芸術劇場コンサ
ートホール、公演企画・監修・プログ
ラム解説担当

(2) 「続北斎の音楽を聴くⅠ」二〇
一三年一月二六日、墨田区主催、す
みだトリフォニーホール 小ホール、
公演企画・演出・プログラム執筆担
当

(3) 「越後酒屋唄の世界」二〇一三
年三月一七日、長岡市芸術文化振興
財団主催 長岡リリックホールコン
サートホール、第一部「酒屋唄の世
界」の構成・演出・プログラム解説・
舞台インタビュ担当

(4) 「続北斎の音楽を聴くⅡ」二〇
一三年九月二三日、墨田区主催、す
みだトリフォニーホール 小ホール、
公演企画・演出・プログラム執筆

(5) 「古典の会 箏曲山田流のうた」
二〇一三年二月八日、洗足学園大
学・大学院主催、同大学シルバーマ
ウンテンB1、公演企画・舞台解説

3. その他
(1) トヨタ ネットタム リレーコ
ラム 二〇一三年一月一月を担当

(2) 「角兵衛獅子」の囃子復元作業、
新潟市月潟地区、二〇一二年四月か
ら継続中

神道国際学会からのお知らせ

- ◎いつも社報や刊行物をお送りくださり、ありがとうございます。
- ◎ご入会のご案内:神道国際学会にはどなたでも入会できます。資料をご請求ください。
- | | | |
|----------------|-----------|--|
| 一般会員（年会費） | 3,000円 | |
| 賛助会員（年会費） | 10,000円 | |
| （法人会員（年会費） | 100,000円） | |
| 特別賛助会員（個人・一時金） | 30,000円 | |
| 特別賛助会員（団体・一時金） | 500,000円 | |

NPO法人 神道国際学会 〒158-0096 東京都世田谷区玉川台2-1-15 ベスト用賀2F
Tel. 03-6805-7729 Fax. 03-6805-7769 info@shintou.org

編集後記

伊勢神宮の式年遷宮の諸儀礼は、
二〇〇四年の山口祭に始まった
が、その庄巻は、二〇一三年の
遷御に他ならない。一〇月二日・
五日に行われた遷御は、天照大
神・豊受大神がこの世の中に姿
を現す、聖なる儀礼である。神
道に関心のある者なら、これほ
ど重要で面白いイベントはない。
遷御ですべてが終わる訳ではな
い。別宮以下の遷宮も行われる。
一連の奉祝行事も、伊勢で催さ
れ、そして古殿拝観も今年三月
末まで続く。『神道フォーラム』
で伊勢神宮、式年遷宮特集す
るのは、ごく当然である。我々
編者は、読者の皆様のご感想を
御待ちしている。（JB）